

2021年12月期第3四半期決算説明会 質疑応答の内容

<2021年11月12日に開催した決算説明会における質疑応答の概要です>

**質問者1**：今回、精密・電子事業で300億円受注を上方修正している。もう少し具体的な内容と新製品効果の有無など、言える範囲で詳細を教えてください。

また、受注残がかなり増えているが、来期売上の考え方としては、今期の受注レベル2,500億円水準ぐらいまで伸ばせるか、まだ気が早いかもしれないが、来期はどのような方向性、規模感になるのか。

**細田**：CMPが200億円、コンポーネントが100億円の増額。

新製品という意味では、EUV向け排気システムは3Qまでには入っていないが、4Qに複数台入ってくる見込み。

来期については具体的な数値はこれからになるが、傾向としては、いまの好調な状況が継続すると捉えている。受注残が増えている点も踏まえてそうみている。再来期については分からない。

**質問者1**：精密・電子事業では営業利益の通期計画を据え置いたため、差し引くと4Qの営業利益率は10.7%で、3Qから7%程度下がる。

これは、案件ミックスが悪化するといういつもの説明だと説明しきれない状況。何か他に特殊要因があるのかなのか、イメージを教えてください。

**細田**：案件ミックスが悪化するという事にどうしてもなってしまう。具体的にどのお客さんのどの案件というところまで捉えた中で、個別の案件ごとに多少採算性が良くないものがあり、それが4Qに売り上がる予定。それを案件ミックスと説明している。それ以上は、お客様の名前をお話するわけにもいかないのです、これに関しては、それ以上でも以下でもない。

**質問者1**：風水力事業について、決算短信の「事業セグメント別の事業環境と事業概況」で、ポンプ事業では中国の石化案件がCO2排出量調整のために遅れているとか、コンプレッサ・タービン（CT）事業でも中国が鈍化していると書いている。建築設備市場向けのポンプもそう。

こういった中国の状況のリスクやポンプ事業、CT事業などの受注計画未達リスクについて教えてください。

**永田：**中国は全体として上半期は良かったが、3Qに入り石油・ガス市場、建築設備市場で少し減速感が出てきている。

ただ、今期業績の下振れ要素となるほど落ちているかという点、そこまではしていない。現状、今回の通期予想からの下振れリスクはそれほど中国に関しては大きくはないと、いまのところ見ている。

建築設備市場はゼネコンでも色々な問題が起きていて、足元ではその影響は直接的には大きくないが、今後、注視して見ていく。

**質問者 2：**為替の業績に与える影響を聞きたい。今回、通期予想を前回の1USドル105円から110円に見直しているが、営業利益の見通しは変わらない。実質は減額修正ということか。

**細田：**円安により連結業績予想の想定為替レートを105円から110円に変更した。円安のほうが我々の決算にはプラスに作用するので、その意味では為替の影響だけを見ると、実質下方修正ととられるところもある。

2Q時点を出した計画は1USドルで105円を前提としたもの。今回110円に変更した影響額は半年分で、営業利益で4億円分ほどとみている。その4億円の影響も含めて、各事業の変動幅の中で吸収できるかの観点で、今回は営業利益の計画値は変えていない。

為替だけを見ると実質下方修正というのはご指摘のとおりではあるが、為替も含めて影響額全体を見たときに、各事業の変動幅で吸収される程度と理解してほしい。

**質問者 3：**精密・電子事業の受注高について、今回の受注計画から3Q業績を差し引きした4Qの水準に関して聞きたい。コンポーネント、CMPの受注残高を見ると4Qは3Qや2Qなどよりも水準が低い。

今回、上方修正をして、今後、上振れ余地が残っているのかもしれないが、現在の受注環境において今後3カ月で変化が起こり得るのか、少し保守的に見ているだけなのか、その辺りの考え方を教えてほしい。

**細田：**特に保守的に見ているということはない。お客様の予定もある中で、12月末まで受注が続いているかどうか、売り上がるかどうかなどお客様の予定されている各案件の毎年の傾向などを加

味した上でこのぐらいだとみている。蓋然性が一番高いところという観点で計画数値を出している。

**質問者3**：環境プラントの営業利益増減要因分析について聞きたい。

冒頭の説明でも解説が一部あったが、ミックスの悪化で、収益性要因の減益額が大きく出ている。特にこの直近3カ月間の実績では、収益性要因としての減額幅が大きく見えるが、この4Qにかけて、もしくは来期の上期にかけてもこのような傾向が続く懸念を持っておくべきか、それとも、この四半期だけの影響と考えるべきか。

**細田**：四半期、3Qという観点では、多少一過性のコストがかかった案件があり、そこに関しては、3Qの採算性の悪さは一過性。

ただ、もう少し構造的なところで、今期はEPC案件が増加しオペレーション&メンテナンス(O&M)が減少している中で、どちらかというとならばEPCよりO&Mの採算性が高いため、そのミックスが少しEPC寄りになりつつある。その点に関しては、来期も少し引きずる傾向があるとみている。

ただ3Qだけを見ると、個別の案件に特化した採算性の低下があり、それは引きずらないとみている。

つまり、この3Qの収益性要因の低下は引きずる面と引きずらない面の両面がある。

**質問者4**：3Qの着地は、全社ベースで社内計画に対してどのような水準だったのか。

**細田**：社内計画は開示をしていない。受注は少し先行した感があり、その面も含めて4Qの受注を、精密・電子事業を中心に修正したが、それ以外は社内計画値並み。

**質問者4**：風水力事業の3Qは季節的にあまり利益が出ないが、それでも利益の額自体が小さかったのかなと思った。

また、営業利益の増減要因分析のファクターを3カ月だけ取り出すと、売上影響がけっこうマイナスに効いていると思うが、多分売上は実際にはそれほど減ってはいない。この辺りを解きほぐしてほしい。

**細田**：風水力事業の3Qはご存知のとおり、季節性の面もけっこうあり、また、環境プラント事業と少し似ている面もあるが、一過性の工事損失引当などが3Qに少し出ている面がある。その辺りの複合要因により、Q3は少し低めに出ている。

**質問者 4**：それは、大きな額か。4、5 億円ぐらいか。

**細田**：規模感としてはそのぐらいのもの。

**質問者 4**：先ほどの環境もそうだが、マテリアルコストが世界中でインフレしている影響が後追いで出てくる懸念はあるか。環境プラント事業や風水力事業の特に足の長い CT 事業などで心配しておかなくても大丈夫か。今期に限らず来年度以降も見てどうか。

**細田**：事業によって異なるが、足の長い、リードタイムの長いものについては、見積段階から少し保守的に見ようとしている。

また、価格が上昇した場合には見積を見直すというような条項をお客様と受注の段階から PO（パーチェイスオーダー）の中に入れ込む工夫をしている。マテリアルコストの上昇局面において、リードタイムの長い案件のリスクヘッジをそのように行っている。

リードタイムが短いものに関しては見積段階で反映し、標準品は値上げをして価格に転嫁するなど事業によって手法は異なるが、対応は行っている。

**質問者 4**：環境プラント事業も風水力事業も、この 3Q の話は材料の話とはあまり関係がなく、技術なのか分からないが、あくまでも一過性のお話で、その他のプロジェクトを見渡しても、いまのところ材料の上昇でこれは問題になりそうだなというのが見えてきているわけでもないか。

**細田**：そう。ゼロではないが一過性だとみている。例えば値上げに関しても、材料が上がってから実際に価格に転嫁するまでに時間差があるので、その時間差の分で多少の影響が出ることはあり、値上げの影響が全くないということではないが、長期的に事業に影響するようなことのないよう対応をしている。

**質問者 5**：風水力事業について、中国の石油化学プラントの投資動向が上期良くて 3Q で落ちてきたという話が先程あった。

この状況は、単に上期に投資をし過ぎたので 3Q が少し弱めに見えるだけの話か。それとも実際に受注環境が悪化していると判断するべきか、または季節的なものか。ここの少しという議論は、どのような見方をすればよいか。

**細田**：中国の石油化学は季節的ということはない。石油・ガス市場はシーズナルに動いている市場ではない。1Q、2Q で中国はコロナ禍からの経済復興も早かったため、グローバルに見ても目立っていたが、3Q になり少し一服した。

また、石油化学に関する政府支援の投資状況で、いろいろな制約や停電などの電気の影響、それは石油化学だけではないかもしれないが、少し勢いをそぐような状況が3Qになって多少見えてきている。

全体観としては、中国が牽引しているのは間違いないので、その辺りは注視していく。

**質問者5**：石油化学の設備投資の動向について、3Qの政府の横槍が入っていると電力の話は最近では改善してきているという話も聞くので、それほどいま控えめにしなくていいと思う。

これは、御社の計画上、3Qは当初弱めにしたので、4Qはもう少し計画上控えめにしているだけか。

**細田**：石油化学に関しては、具体的なプロジェクトの出る時期で業績予想を出している。控えめにしているというよりは、出てくる案件と時期の積み上げの中でやっている。

**質問者5**：昨今流行の環境対応、逆に石炭をまた再開しなければならないとか電力も自由化になっているなど、こういった外部要因はあまり気にしなくて良いか。

**細田**：その辺りは見極めなければいけないと思い注視しているが、計画の中でそれが影響してというよりは、具体的に見えている案件の積み上げの中で、このように見えている。

**質問者5**：決算短信の4ページに矢印を出している。

前回、2Qでは、CT事業は下を向いていたが、この3Qでは上を向いている。この3Qで2Qと比べて何が変わったのか。

**細田**：2Qと3Qの比較では、特にサービス&サポート（S&S）で、昨年から今期の上期まではコロナ禍の影響で人の動きが制限されているところもありS&Sが停滞気味だった。

それが今期の下期に向かって、より活発化してきている。その辺りが2Qに比べて上向きになっている要因の一つ。

以 上